

上五島町文化財調査報告書第1集

小浦遺跡

1987

長崎県上五島町教育委員会

上五島町文化財調査報告書第1集

小浦遺跡

—長崎県南松浦郡上五島町所在の遺跡—

1987

長崎県上五島町教育委員会

発刊にあたって

このたび、当町にあります小浦遺跡の試掘調査に関する報告書を刊行することになりました。この遺跡は、昭和59年に実施されました県文化課の遺跡分布調査によってその存在が知られていたものであります。町道青木線の計画予定地でもあることから、工事に先立って試掘調査をおこなったものであります。

調査は昭和60年6月に実施し、短期間の調査ではありましたが、本報告書として発表できるような成果を得ることができました。この地に、はるか、縄文時代という遠い古い時代からの人々の生活の痕跡が認められ、現在にまで至っているということについては、調査に関係しましたものとして、驚きとともに感慨深いものがございます。

この報告書が、学問的にはもちろんのこと、大方の方々に、自然と人間のかかわり、人間の生き方等についての理解の一助ともなりますならば、大層幸いといたすところであります。

最後になりましたが、今回の調査の計画・実施にあたりましては、現地の方々は勿論、いろいろの方々に多くの御援助や御協力をいただいております。特に直接現地で試掘調査にあたっていただきました県文化課の藤山、久原両先生には一方ならぬお手数をおかけいたしました。心から感謝の意を申し上げ、発刊の御挨拶と致します。

昭和62年3月

上五島町教育委員会

教育長 吉山勢一

例　　言

1. 本書は、長崎県南松浦郡上五島町飯ノ瀬戸郷青木字小浦所在の遺跡に対する、試掘調査の結果報告書である。

2. 調査は、上五島町教育委員会・上五島町が主体となり、長崎県文化課が協力して、昭和60年6月3日から6月8日まで実施した。

3. 調査の実施にあたっての関係者は次のとおりである。

上五島町教育委員会	教育長	古山勢一
	社会教育係長	前田英敏
	社会教育指導員	中山利郎

上五島町役場	建設課長	吉村禎師
	建設課技術吏員	内野国夫
	建設課技術吏員	田辺恵司

長崎県文化課	文化財保護主事	藤田和裕
	研修員	久原巻二

4. 本書は分担執筆し、図版もそれぞれの項の執筆者が作製したもので、各項の執筆者名は文末に記している。なお、本報告書作製にあたっては、県文化課の安楽勉・村川透朗の両氏に協力いただいた。

5. 本遺跡の調査に関する遺物、写真、図面等は長崎県文化課が保管の任にあたっている。

6. 本書の編集は藤田による。

本文目次

I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の立地と環境	2
(1) 地理的環境	2
(2) 周辺の遺跡	4
III 調査	
(1) 調査の概要	5
(2) 土層	6
(3) 遺物	7
1 土器	7
2 石器	10
IV まとめ	18

表目次

第1表 土層・石材別出土石器重量・出土点数	11
第2表 小浦遺跡出土石器計測表	11

挿図目次

第1図	小浦遺跡位置図	1
第2図	小浦遺跡周辺地形・遺跡分布図	3
第3図	調査区域図	5
第4図	土層図	6
第5図	出土土器実測図	8
第6図	出土石器実測図(1)	10
第7図	(2)	12
第8図	(3)	13
第9図	(4)	14
第10図	(5)	15
第11図	(6)	16

図版目次

図版1	小浦遺跡遠景	21
図版2	小浦遺跡遠景・近景	22
図版3	調査風景・遺物出土状況	23
図版4	土層	24
図版5	出土遺物(土器)	25
図版6	(土器)	26
図版7	(石器)	27
図版8	(石器)	28
図版9	(石器)	29

I 調査に至る経緯

小浦遺跡は、当初、遺跡地図あるいは文献などにはなかった遺跡で、当遺跡が調査されるに至ったのは、次のような事情によるものである。

長崎県文化課では、昭和56年度から遺跡周知事業を計画し、実施している。これは、県内各市町村と協力して遺跡の正確な位置や性格、また現状について把握し、資料を整備し、広い範囲に周知してもらうことなどを、目的とするものである。

この計画の昭和59年度分として、分布調査を実施した町のひとつに上五島町があった。県文化課では、かつて、海上石油備蓄基地建設に伴う試掘調査を実施したが、その際、北または西の風を受けにくい、ほんのわずかな平坦地に遺跡を検出したことがあり、そのためこの分布調査でも、特にそのような条件を満たす場所として、当該地を見ていた。分布調査の際、現地を実見した感想では、南むきで海に面した緩斜面ということであり、何らかの生活跡か埋葬施設の残っている可能性が考えられた。三方を山に囲まれているが湧水があって、細流が東側と西側を流れしており、生活するための条件は整っているものと思われた。地表面での採集遺物は、須恵器片のみであったが、土器片も若干みられ、五島列島などでの、海岸部に位置する縄文時代以降の遺跡のあり様としては良好なものと判断した。

また、この分布調査時に、この場所に町道建設の計画があり、各年度の事業として実施されている事を聞き、同町の建設課を訪れた。そこで、計画実施の年度や方法、場所などについての説明を求めるとともに、遺跡の存在する可能性が高い事から、町が計画している道路の建設に当っては、事前の調査が必要であることを申し入れ、協議の結果、昭和60年度事業として計画された。

昭和60年になって、当遺跡の部分に、計画どおり道路が作られることとなり、町当局より調査協力の依頼があった。調査の主体は上五島町・上五島町教育委員会とし、県文化課は調査員を派遣して対応することとなった。

(藤田)



第1図 小浦遺跡位置図

II 遺跡の立地と環境

(1) 地理的環境

小浦遺跡は、五島列島中通島の西部、若松瀬戸に開いた青木浦湾奥の海岸に占地する。行政区画上は、南松浦郡上五島町飯ノ瀬戸郷青木字小浦である。

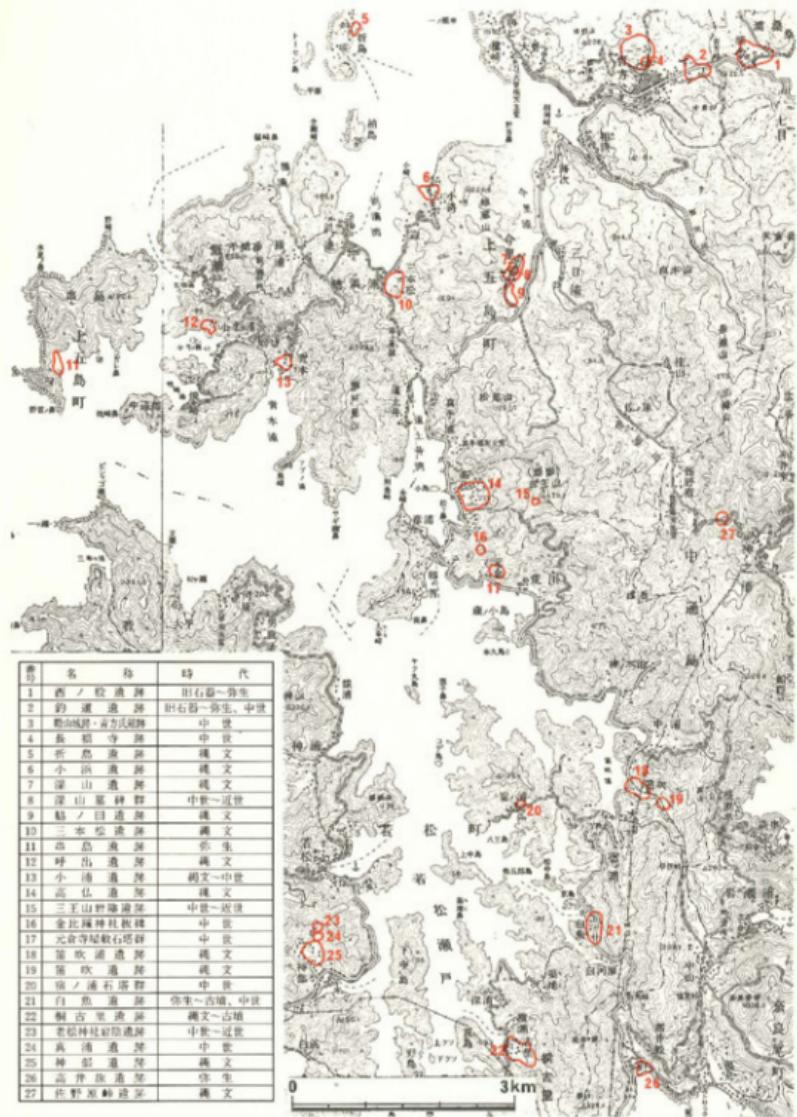
五島列島は、長崎の西方約100kmの東シナ海に浮ぶ140余の島々からなる島列で、北東から南西へ宇久・小値賀・中通・若松・奈留・久賀さらに福江島とつづき、男女群島も含め150kmもある。前二島は北松浦郡の2町、中通島以南は福江市と南松浦郡の10町となり、あわせて約10万人の住民がいる。

新生代第三系に属する五島層群を基盤とし、福江溶結凝灰岩や花崗岩類の貫入があり、鬼岳や小値賀島などの火山もあって、一層複雑な地形をつくっている。島内には断層線が発達し、列島の主体部は地壘山地の集合体でもある。従って福江島の父ヶ岳(461m)、中通島の番岳(443m)、三王山(439m)などの高い山地があり、壯年期性の山容も多く見られる。若松・滝河原・奈留や田浦瀬戸は、地溝に当り、深い溺れ谷や多島海をつくり、極めて水平肢節の大きな沈水海岸となっている。

また五島は日本列島の最西端に当り、その地理的位置が開発の支障となる面もあったが、遣唐使の中繼地となるなど大陸文化の玄関ともなり、豊かな自然や伝統文化が残り、その西端性がいかされている面もある。

中通島は、五島列島の中では福江島(324km²)に次いで二番目の面積(169km²)をもち、南北38km、東西19km、四方に半島のがび十字形をしている。断層系が発達し、河谷や海岸線が直線をなすものが多く、小さな地形区に分けられる。地形は複雑で、低平地は少なく、人江の奥にみられる小平地に集落が割換している。海岸地形も出入に富み、典型的なリアス式海岸がみられる。外海に面する岬には海食崖が発達し、白波が砕けている。有川・青方や奈良尾が主邑をなし、フェリーや航空便も就航して本土との交通も便利になっている。青方港外には、洋上石油備蓄基地の建設が進行中である。

小浦遺跡は、中通島の胴部から西へ派生した半島の中南部にあり、若松瀬戸の北部に面している。この小半島は、浜ノ浦と道土井とを結ぶ線以西に当り、楠木山(309.3m)や瀬戸見山の山塊と、千間岳(250m)を中心とした山塊とに二分される。五島層群の砂岩からなり、侵食がすすみ、中起伏山地が海に迫っている。北から猪ノ浦、西から名切浦、小手ノ浦、焼崎浦、南から青木浦・アブノ浦などの深い湾入りがあり、かつての谷が沈水してできたものである。若松瀬戸は、典型的なリアス式海岸のみられる所で、特にその南半部は複雑な入江と島々とが美しい海岸美をつくり、西海国立公園の一部となり、さらに昭和47年には若松海中公園の指定を受けた。波静かな入江は、良港・好漁場となり、ハマチや真珠などの県内を代表する養殖場となっている。



第2図 小浦遺跡周辺地形・遺跡分布図

青木浦は、幅800m、奥行1200mほどの溺れ谷で、南の若松瀬戸へ向いて開き、両側に山が迫っている。遺跡は、最湾奥の海岸に近い緩斜面にある。楠木山北西部の鞍部からつづく谷間にあり、谷のほぼ中央を小川が流れ、南向きの扇状地性地形である。遺物は、海岸や海岸に近い畠地に散布している。遺跡からは、青木浦をとおして、若松島北部を望むことができる。

(2) 周辺の遺跡

若松瀬戸を中心とした遺跡分布図を第2図に示した。図中には27ヶ所の遺跡があり、旧石器時代2、縄文時代15、弥生時代7、古墳時代3、中・近世12ヶ所の内訳となっており、所産年代の複合する遺跡が多い。

旧石器時代の遺跡は、1の西ノ股、2の釣道遺跡で、ナイフ形石器・細石核などが採集されている。

縄文時代の遺跡は多い。五島の豊かな海の幸によるものと思われるが、域内には今のところ貝塚は知られていない。1の西ノ股遺跡は、地先海面の埋立工事に先だって昭和60年調査が行われ、潮間帯の砂礫層から縄文時代前期～晩期を中心とした土器・石器が大量に検出された。22の桐古里遺跡は、古くから知られた遺跡で、正式な調査はないが、阿高式・鐘ヶ崎式・北久根山式・夜日式土器や弥生土器など多くの遺物をもつ良好な遺跡である。

弥生時代になると遺跡の数が少くなり、古墳時代になると一層減少する。

浦部島（中通島）の下沙汰職となった藤原家高は、歴仁元（1238）年当地へ入部し、建長元（1249）年には青方に移り、3の殿山に城を構え、青方氏と称した。青方氏から分れた白魚氏は、21の白魚に居館をおき、「白魚千軒」と言われる程の集落を形成し、強力な水軍を有したという。両氏は、元寇に際し異国警固番役も勤仕し、後には松浦党の一員として、いろいろな動きを見せている。これらの活動を物語る中・近世の遺跡が多い。

当地域に知られる遺跡は、大きな入江の奥や湾口の小平地に立地するものが多い。5の折島、11の串島遺跡、岡外ながら青方湾口に浮ぶ祝言島遺跡のように、全島山だけの小さな島にも小規模ながら遺跡がみられる。これらは、北風をさけるほんのわずかな海岸の小平地に立地しており、海へ向いた遺跡のあり方として興味がもたれる。

（久原）

参考文献

- 佐藤久（1952）五島列島の地形並に地質 五島列島～九十九島～平戸島学術調査書
桑山龍進（1964）五島一般調査報告 長崎県文化財報告書第2集
長崎県（1981）土地分類基本調査「有川・漁生浦・佐尾」5万分の1
長崎県文化課（1984）埋蔵文化財包蔵地カード「上五島町」「新魚目町」「有川町」「若松町」「奈良尾町」
上五島町（1986）上五島町郷土誌

III 調査

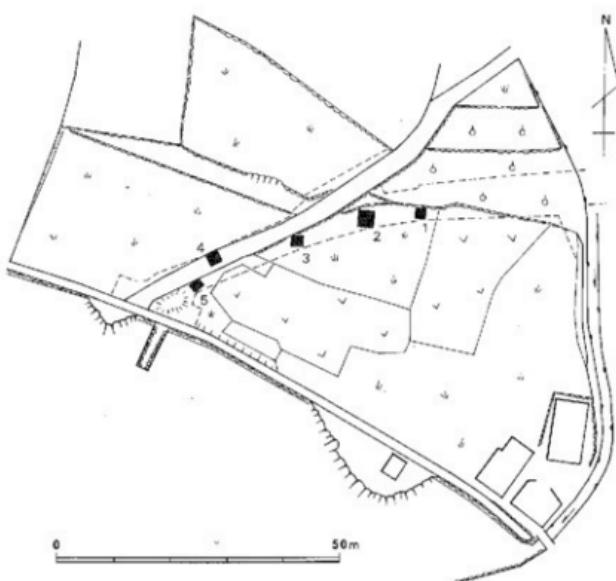
(1) 調査の概要

長さ約50mの範囲で、幅6mの道路予定地内に試掘壙を入れることにしたが、荒地もあり、草木の伐採から始めた。試掘壙の位置は、現在の畑地、石垣、道路などの状況から任意の場所に定め、また大きさについても、それぞれの状況によって大小の差が生じた。

第1試掘壙から第4試掘壙までは $2\text{m} \times 2\text{m}$ の大きさを基本にしたが、第2試掘壙は状況が良いため $3\text{m} \times 3\text{m}$ に拡張して調査を行い、第5試掘壙は最初から $2\text{m} \times 1.5\text{m}$ とした。試掘壙の名称は、東側から西に向けて第1試掘壙から第5試掘壙までとした。

各試掘壙ごとに掘り下げを進め、原則として東壁と北壁の土層の状況を記録した。しかし、確実な造構にはどこもかからず、土層の状況などからも、これ以上の調査の必要はないものと判断し、調査を終了した。

それぞれの試掘壙の状況や土層については、項を改めて述べることとする。



第3図 調査区域図

(2) 土層

調査した5つの試掘壙は、それぞれ層相が異なっているが、扇状地性の地形を反映して砂礫層を主体としている。第1・4・5試掘壙は、擾乱が深かったりで状況が悪い。整層状況を示している第2・3試掘壙について説明したい。

第2試掘壙

- 第1層 黒色砂質土層 小さな礫をふくみ、さらさらした砂質土からなる旧耕作土。
第2層 黄褐色砂礫層 しまりのよくない砂礫層で、30~40cm大のやや平たい砂岩亜角礫に、黄褐色（一部茶褐色）の砂質土が充填し、下位ほど粘質が増す。60~120cmの厚さをもつ。

- 第3層 黒褐色粘質土層 砂岩の亜角礫や砂もふくむ。砂や粘土粒のこびり着いた繩文土器や石器が多く出土し、主要包含層、30~50cmの層厚がある。

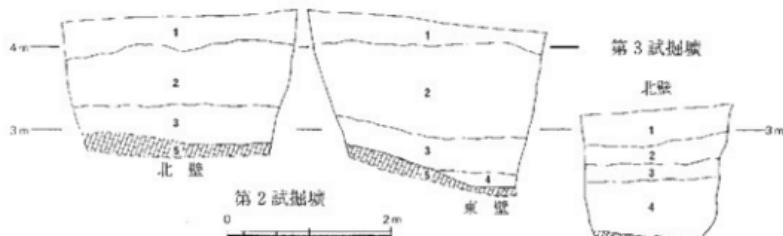
- 第4層 赤褐色砂礫層 南半部のみにみられ、2~5cm大の亜円礫を主としている。

- 第5層 礫層 五島層群の砂岩礫がぎっしりつまり硬い。無遺物である。

第3試掘壙

- 第1層 黒色砂質土層 旧耕作土。表面に飛砂層と思われる砂層がうすくなっている。
第2層 砂礫層 灰黃褐色の砂や砂質土がつまつた砂礫層。10~30cm大のやや偏平な砂岩礫が多く、しまっていない。
第3層 黑褐色砂礫層 1~2cmの小亜円礫が多く、しまっていない。
第4層 黄褐色砂礫層 第3層より大きい礫が多く、小礫や粗粒砂が充填している。
第5層 礫層 第2試掘壙と同じ。地山面と考えて掘り下げを止めた。

(久原)



第4図 土層図

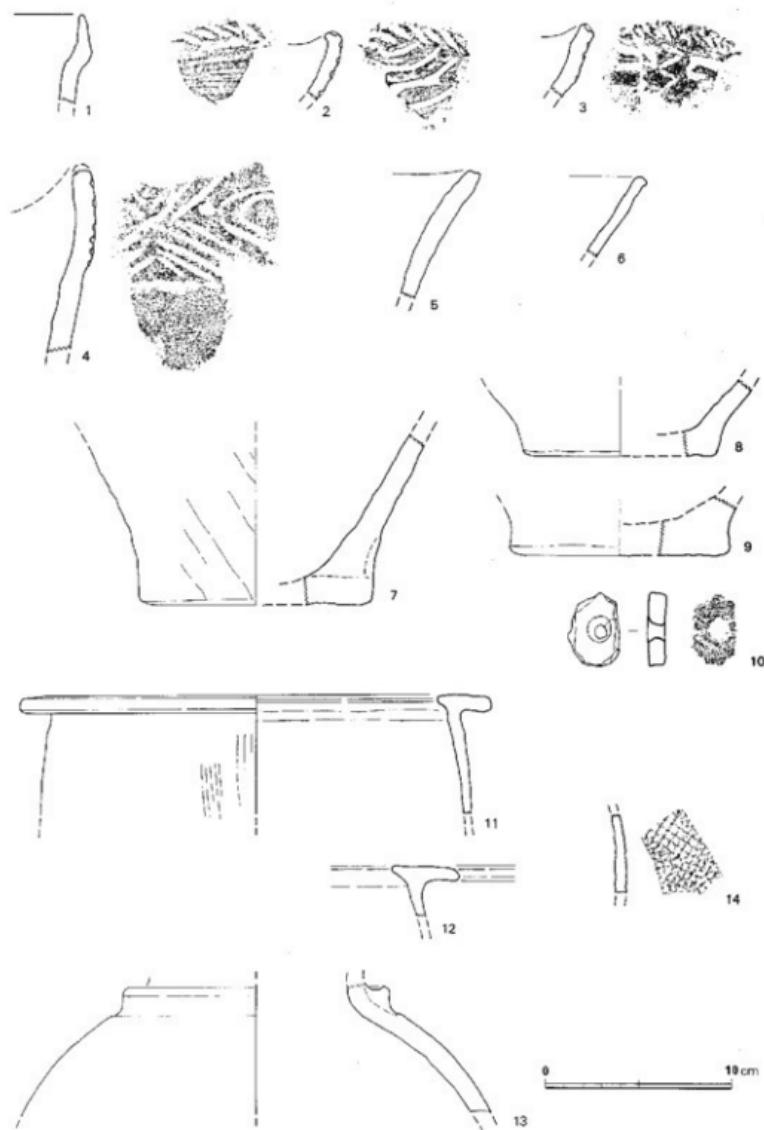
(3) 遺物

今回の調査で検出された遺物は、主に土器と石器であるが、土器は縄文時代後期のもののが多かったが、摩滅がひどく、図にできるようなものの数は少なかった。石器の出土量は土器に比べ少ないものの、石斧、石鎌、搔器などが出土している。

I 土器

縄文式土器（第5図 1~10）

1. 小破片で全形や大きさは不明であるが深鉢であろう。やや内湾した口縁部がわずかにくびれ、ゆるやかに張る胴部に続くものと思われる。内外面ともミガキかナデたかの痕跡がわずかに認められるが、器表がもろくうすく剝離しつつあって断定はしがたい。外面は濃い茶褐色、内側は茶褐色を呈し断面内部は黒褐色である。胎土に小砂粒を含むが、焼成は良い。2. 鉢の口縁部であるが、3とともに小破片で全形や法量については不明である。内湾しつつ底部にいたるものと思われる。外側表面に小さな棒状のものか厚目のヘラ様のもので3mmほどの溝を半円状に施している。同じような刻目が口縁端部にも外側から内に向けて付けられている。器内面は貝殻と思われるものでの横方向への条痕が残っている。内外面ともに茶褐色で、断面内部は濃い黒褐色を呈している。胎土に小砂粒を含むが焼成は良い。3. やや内湾しつつ伸びる鉢の口縁部である。器外に小さな棒状のものでの浅い刻みが付けられている。文様帶の下の部分はわずかにしか残っていないが、磨いたように見える部分もある。口縁上端面にもこれより細い刻みが斜め方向に付けられている。内側はヘラ様のもので、横方向に削ったような痕跡が残っている。内外面、断面の部分とともに濃い茶褐色を呈している。胎土には大小の砂粒を含むが、焼成は良い。4. やや大き目の深い鉢であると思われるが、法量は定かでない。内湾しつつ伸びる口縁部とやや外方に張りだす肩の一部である。口縁部外面に、斜め方向や半円形の刻みを入れている。表側の胴部と内側はナデて仕上げたように認められる。全体的に茶褐色であるが、断面の一部は黒褐色を呈している。胎土に石英のほか白色の小砂粒を含む。焼成は良いが、現状は表面がもろくなっている。5. 無文の深鉢の口縁部であるが、これも全形や大きさは不確かである。わずかに外湾しつつ伸びた口縁端部をやや平らにおさめている。内外面ともに横、斜め方向に貝殻状のもので付けたと思われる条痕が残っている。全体としては茶褐色であるが、断面部や器表の一部は黒褐色を呈している。胎土にやや大きめの小砂粒を含む。焼成は良い。6. これも小破片で全形や大きさは不明。浅鉢か碗様のものになるものと考えられる。まっすぐに伸びた口縁端部を、わずかに外側にまげるようにしておさめている。器表が荒れているが、横方向にナデて仕上げたもののように見られる。内外面や断面部ともに黒褐色を呈している。胎土に小砂粒を含むが、焼成は良い。7. 深鉢の底部で、底の部分の直径は12cmほどに復原できる。平らな底に外傾しつつまっすぐ伸びる胴部が付くが、外側に



第5図 出土土器実測図(2)

はヘラ様のものでナデ付けたような痕跡がある。内側底に近い場所にも指でのナデと思われる部分が残っている。外側は茶褐色、内側は淡い黒褐色と淡い茶褐色を呈する。胎土には荒い砂粒を含む。焼成は良い。8. 小破片で、大きさについては確定的なものではない。平らな底で、わずかに胴の張る形になるものと思われる。内外面にヘラ様のものでナデ付けた痕跡がある。内側は淡い黒褐色、外側は茶褐色を呈している。小砂粒を含むが良い胎土で焼成も良い。9. 平底で、復原した直径は12cmほどになるものと思われる。底部と体部の接合部に、部分的に貼り足しをした場所もある。内側は淡黒褐色、外側は明るい茶褐色を呈している。胎土は小砂粒を含む。焼成は普通であるが、現状はもろくなっている。1~6とともに縄文時代後期のもので、出水式あるいは南福寺系統のもの(2・3)や北久根山式(4)などがある。7~9の底部もこれらと同時期のものであろう。いずれも第2試掘査の第3層からの出土である。10. 有孔円盤状のものであるが、不整形でにわかには断じがたい。白っぽい小砂粒を含む胎土で、焼成は良い。淡い茶褐色を呈している。1~9と同じく第2試掘査の第3層からの出土である。縄文時代後期の土器の補修孔の可能性も考えられる。

弥生式土器 (第5図 11~13)

11. 破片からの復原である。口縁部の直径は25cmほどになる。ほぼ水平に近く張り出した端部は、外側は丸く、内側はやや尖らせ氣味におさめている。外側は口縁部を横方向にナデ、その下部に縦方向にハケ目が残る部分もある。内面はナデで仕上げている。外面は茶褐色で、内面は淡茶褐色を呈している。胎土は小砂粒を含むが良好。焼成も良い。12. 小破片で、その大きさについては確定できない。口縁部は11と同じようにほぼ水平に近く端部の外側は丸く、内側は尖らせ氣味におさめている。全体的に横方向にナデで仕上げている。内外面ともに淡い茶褐色を呈し、胎土には石英などの小粒砂を含む。焼成は良い。11・12は第3試掘査の第2層からの出土である。13. 胴の丸い壺の肩の部分で、胴の直径は30cmほどの大きさのものであろう。肩部と頸部のさかいに、断面三角形に近い帯をめぐらせていている。この部分は貼り付けのあとで、横方向にナデで仕上げている状況が残っている。外面は茶褐色、内面は淡い茶褐色を呈し断面には黒褐色をした部分も認められる。胎土は4mmくらいまでの小砂粒が多く混じる。焼成は良い。第2試掘査の第2層から出土した。

須恵器 (第5図 14)

14. 昭和59年10月の分布調査時に、本遺跡を確認した際の採集品である。3cm×4cmほどの大きさの破片で、壺の体部の一部であろう。叩痕が外側に残り、内側には当て具のあとが残っている。全面茶色を呈している。胎土は小砂粒をわずかに含むが良質のもので、焼成も良く堅い。

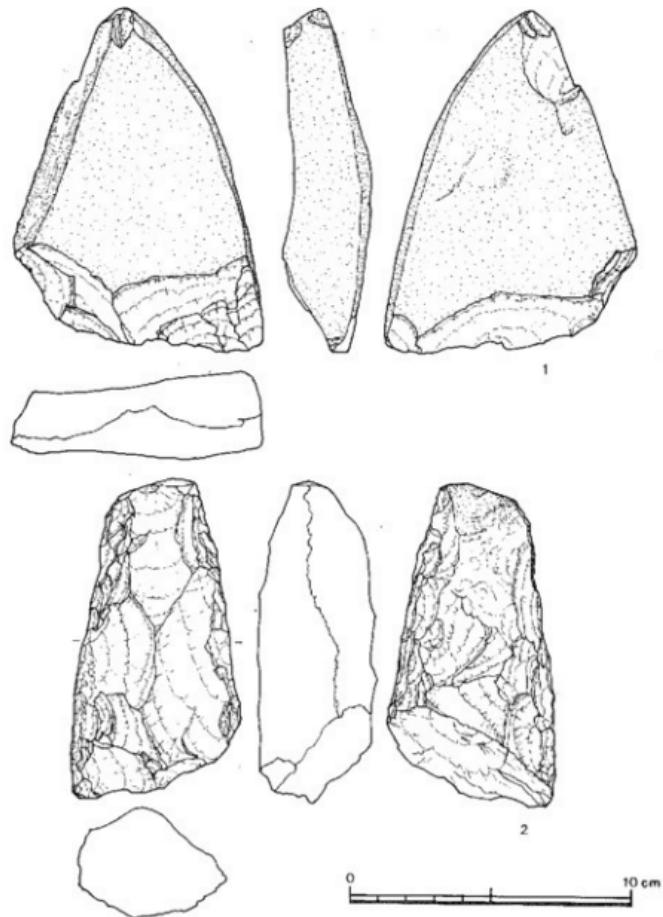
(藤田)

2 石器

第1表のように計205点の石器・剝片が出土し、そのうち38点を図示した。

第1試掘調査の石器 (第8図 5)

わずか2点の出土しかなかった。5はやや粗い質の安山岩を利用した削器。主要剝離面の片面だけにかんたんな刃部加工がなされている。



第6図 出土石器実測図(1)

第1表 土層・石材別出土石器重量・出土点数

区 分	第1試掘場			第2試掘場			第3試掘場			第4試掘場			第5試掘場			表面 探査	総計			
	1	2	計	1	2	3	4	計	1	2	3	計	1	2	3	計				
安山岩	87.5	87.5	175.0	360.5	78.9	148.5	26.7	3.6	3.0	53.3	64.6	95.5	160.1	10.5	10.5	5.2	1735.6			
(1)	(1)	(1)		(5)	(5)	(5)	(1)	(1)	(1)	(1)	(6)	(8)	(8)	(1)	(1)	(2)	40			
砂 岩				371.0	45.2	416.2	1.9			1.9		16.7	16.7				6.7	441.5		
				(1)	(2)	(3)	(1)			(1)		(6)	(6)				(1)	45		
黒曜石	1.0	1.0	2.2	237.7	133.9	2.8	166.6	2.5	20.0	4.3	26.8	5.4	18.0	32.9	56.3	0.8	5.0	5.8	291.8	
(1)	(1)	(1)	(2)	36	55	(1)	99	(2)	(3)	(4)	(1)	(1)	(8)	(8)	(2)	(3)	(4)	(132)		
頁 岩												56.7	56.7					56.7		
												(1)						(1)		
計	88.5	88.5	177.0	358.7	748.0	2.8	202.0	831.1	23.6	7.3	62.0	5.4	129.3	145.1	287.8	0.8	15.5	16.3	47.2	2525.6
	(2)	(2)	(2)	29	80	(1)	(10)	(5)	(6)	(6)	(5)	(1)	(8)	(8)	(5)	(5)	(7)	(6)	(26)	

重積; g (出土点数)

第2表 小浦遺跡出土石器計測表

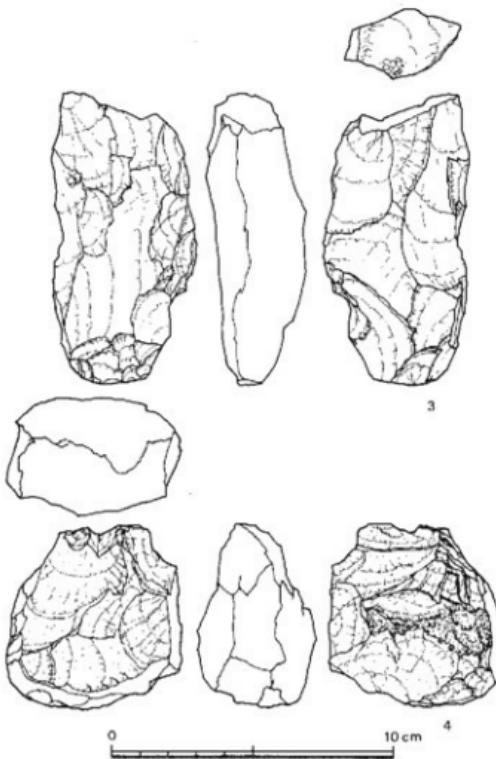
種 別	出 土 位 置	器 種	石 材	計 測 値 (mm, g)				備 考	
				最大長	最大幅	最大厚	重 量		
1	Ⅱ	2	磨 砕	砂 岩	122	89	31	371.0	
2	*	*	石 砕	安 山 岩	115	60	42	339.0	刃部破損
3	*	*	石 銛	*	104	51	36	210.0	石斧の半製品?
4	*	*	*	*	66	63	42	201.0	
5	Ⅰ	*	刮 刀	*	51	78	25	87.5	
6	Ⅱ	3	琢 器	*	46	31	10	13.0	
7	*	2	*	*	58	41	19	48.3	
8	*	*	削 器	*	48	74	22	61.8	
9	*	*	石 鋸	黒 曜 石	19	15	4	0.7	
10	*	3	琢 器	安 山 岩	26	37	14	7.8	刃部のみの破損品
11	*	*	*	*	60	32	15	21.5	
12	*	*	*	黒 曜 石	53	41	13	15.2	
13	*	*	*	砂 岩	46	35	13	16.9	
14	*	*	*	安 山 岩	46	47	19	37.9	
15	*	*	*	*	54	44	22	39.9	
16	*	*	刮 刀	*	46	60	29	52.5	
17	*	*	琢 器	黒 曜 石	18	20	7	1.9	
18	*	*	刮 刀	*	26	35	10	7.8	
19	*	*	使用歴ある剥片	*	26	29	12	6.3	
20	*	*	石 銛	*	23	23	5	1.3	先端部破損
21	*	*	削 器	安 山 岩	50	64	19	39.2	
22	*	*	*	*	39	56	22	37.2	
23	*	*	*	*	53	70	42	62.5	
24	*	*	剝 片	*	44	44	13	19.1	
25	*	*	使用歴ある剥片	黒 曜 石	25	17	6	1.9	
26	*	*	*	*	26	19	5	1.9	
27	*	*	*	*	24	21	5	2.0	
28	*	*	削 器	*	25	28	8	5.3	
29	*	*	使用歴ある剥片	*	23	26	4	1.3	
30	*	*	削 器	安 山 岩	49	62	30	95.2	
31	*	*	使用歴ある剥片	*	37	56	11	19.3	
32	*	4	石 銛	黒 曜 石	25	23	6	2.8	
33	Ⅲ	2	石 銛	*	34	23	12	11.0	
34	Ⅳ	*	琢 器	安 山 岩	43	32	15	17.3	
35	*	*	石 銛	黒 曜 石	16	20	4	1.4	局部分裂、コーリング
36	*	*	*	*	19	12	3	0.6	
37	*	*	琢 器	頁 岩	80	43	21	56.7	
38	*	3	使用歴ある剥片	安 山 岩	49	28	11	11.3	

第2試掘場の石器（第6～11図 1～4、6～32）

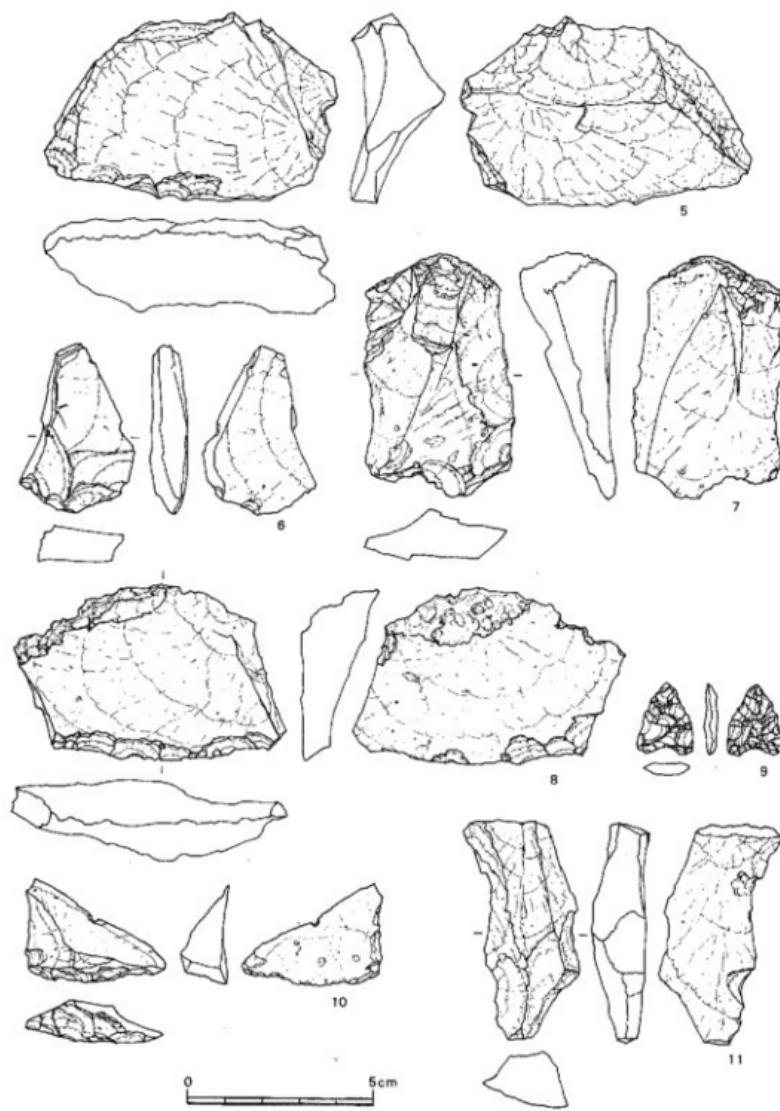
石器総出土数の半数をこえる104点が出土し、特に第3層からの出土が多い。

第2層の石器は、7点図示した。1はチョッピング・ツールと思われる礫器。両面からの大胆な交互剝離によって円弧状の刃部を作り出している。素材は、略三角形の板状の砂岩亜角礫で、やや縁味をおびた淡黄褐色を呈する。黒色の付着物（マンガン？）がみられる。2は打製石斧、横からの打削を主として概形をつくり、側縁を敲打で仕上げている。刃部を大きく破損しているため全体形はわからない。3・4は安山岩の石核。3は石斧の半製品の可能性もあるが、両端の打撃痕などから石核と考えた。4は円礫の素材に各方向から打撃を加え、不定形の剥片をとっており、平坦な打面をもっていない。7は安山岩の縦長剝片の先端に、ノッチを加えて凹刃をつくっており、周縁に細かい使用痕が多い。8は自然面を打点とした横長剝片の両端を切除し、ていねいな加工で横刃をつくっている。

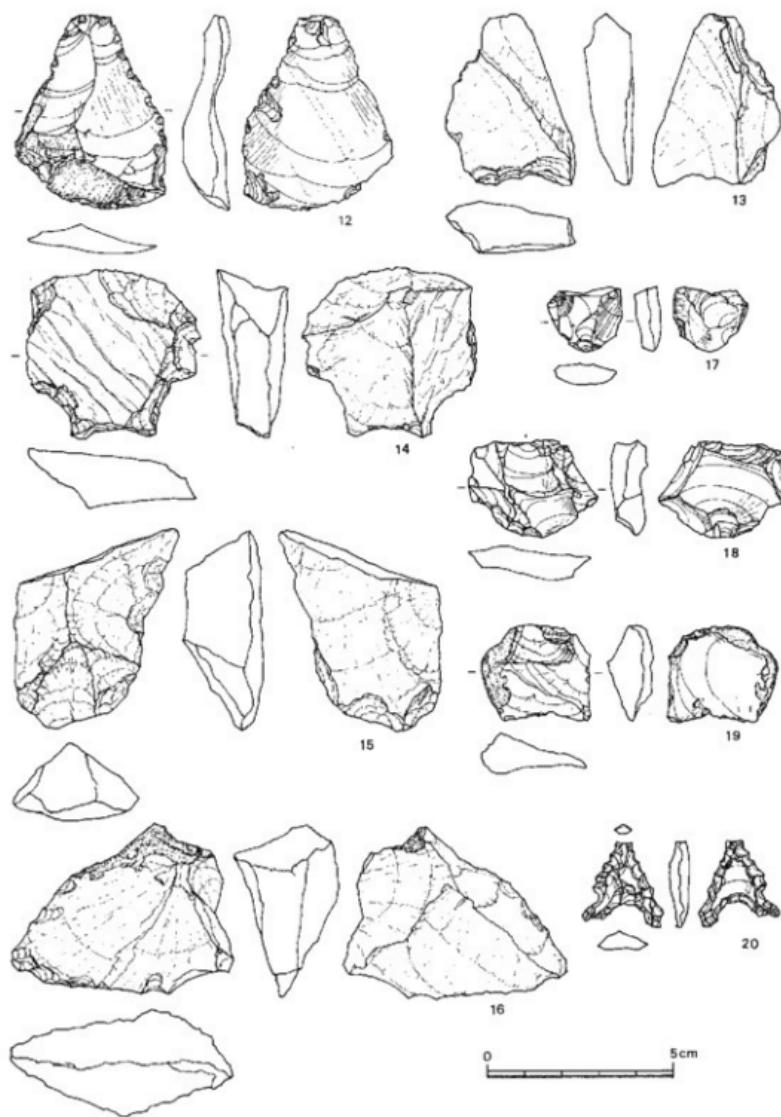
第3層の石器は、23点示した。うち15点が搔器削器である。6は安山岩の小片を利用して、先端に凸刃をつくっている。10は大きな角度をもつ刃部のみ。12は全周に細かい加工・使用痕があり、棱は磨耗している。14は抉りを入れ、2つの角状の突起をつくり出し、角度の大きな3つの凹刃ができる。15は縦長剝片の先端部を利用した搔器。17も先刃をもつが、上部を破損している。裏面には、使用によるためか擦痕が多く見られる。18は残核を転用したもの



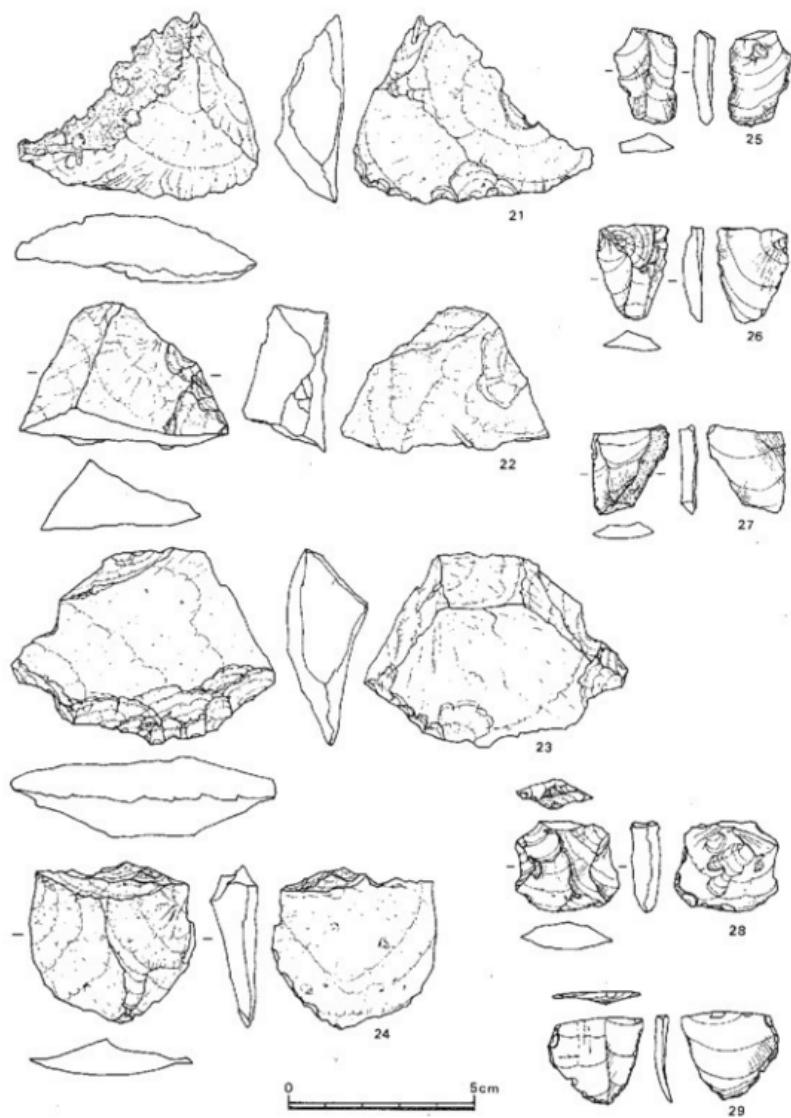
第7図 出土石器実測図(2)



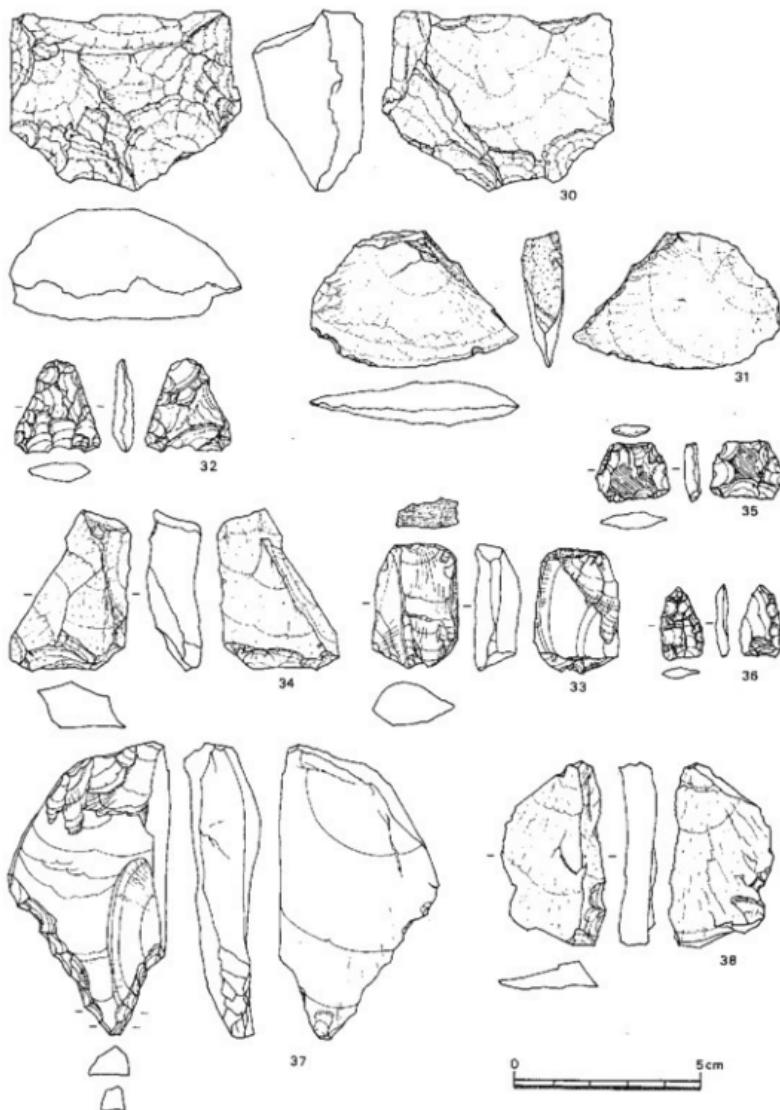
第8図 出上石器実測図(3)



第9図 出土石器実測図(4)



第10図 出土石器実測図(5)



第11図 出土石器実測図(6)

と思われる。19は3cmぐらいの大きさの黒曜石円盤からとられた剝片。細かい使用痕がみられる。20は鋸歯鎌、先端部を欠損している。連続的な剝離で鋸歯状の側縁をつくり、脚根部でやや強く抉りを入れてくびれ部をつくっている。16・21・22は略三角形をした削器。16は断面三角形の横長剝片の先端の一部に刃部を設けている。21は横長剝片の両側から加工して整形し、一次剝離面に片面加工で刃部をつくっている。23は白い斑点のあるやや粗質の安山岩を利用し、弧状の刃部をもつ削器としている。25~27・29は黒曜石の使用痕ある剝片。いずれも微細な使用痕がほぼ全周にあり、29はローリングが著しい。30は右斧の刃部を思わせる厚手の削器。交互剝離状の加工によって弧状の刃部をつくっている。

第4層からは、32の石鎌1点のみが出土した。青灰色の黒曜石を利用しておらず、ややローリングを受けている。

第3試掘場の石器（第11図 33）

出土した数も少なく、器種認定ができるものは、33ひとつのみであった。ローリングを受けた剝片が目立つ。33は黒曜石の石核と考えられるが、剝片の剝離痕は少ない。

第4試掘場の石器（第11図 34~38）

第2試掘場に次いで点数は多かったが、小剝片がほとんどであった。34は不整形の剝片を利用した搔器。多孔質の粗い安山岩で、風化が進んでいる。35は局部磨製の石鎌。両面のほぼ中央部を磨製している。先端欠損。36はやや小型の石鎌。表面にはていねいな加工がみられるが、裏面には剝片様に、一次面が残っている。37は見事な錐器。厚めの縱長剝片の先端部に、両側邊から刃溝を施し、刃部を作っている。最先端が小さく欠損している。素材は淡黄色をした良質の頁岩で、円盤の転石を利用して、その自然面を打点とした石核から剥ぎ取られている。

第5試掘場の石器

わずかの剝片が出土しただけで、石器と考えられるものはみられなかった。

調査した5つの試掘場の土層堆積状況が必ずしもよくなく、砂礫層を主体としており、ローリングを受けた石器・剝片が多かった。従って以上の石器が、ひとつの小文化期の所産であるとは断定できないし、小範囲の調査であり全体の石器組成をうまく反映しているともいいくれない。今回出土した205点の石器・剝片の中で、石器と考えられるのは30点で、使用痕のある剝片がこれに加わる。30点の内訳は、搔器・削器19、石鎌5、石核3、石斧・錐器・礫器各1である。搔器・削器の出土数が多いことが、ひとつの特色である。

(久原)

IV まとめ

今回、調査を実施した小浦遺跡は、南向きの、若松の瀬戸の入口の海に面したゆるい斜面であり、細いながら小川がすぐそばを流れるという立地条件などから、なんらかの生活址、あるいは墓地などの遺構の存在を当初から考えていた。しかしそのような遺構の確認はできなかつたものの、第2試掘場では、縄文後期の単純な文化層と考えて良い層の存在が明らかにされた。ただ、この層にあっても土石流性の紗礫層が主体を占め、遺物も摩滅していることから、これらは明らかに流れ込みと思われ、地形から考えても、遺跡の中心は調査地点からやや離れた上方に存在するものと推測された。今回の調査によって、縄文時代後期から弥生時代、古墳時代、さらに中世の遺物が検出されたことから、この地が、長い期間にわたって断続的に生活が営まれた跡であることは、間違いないものと思われる。

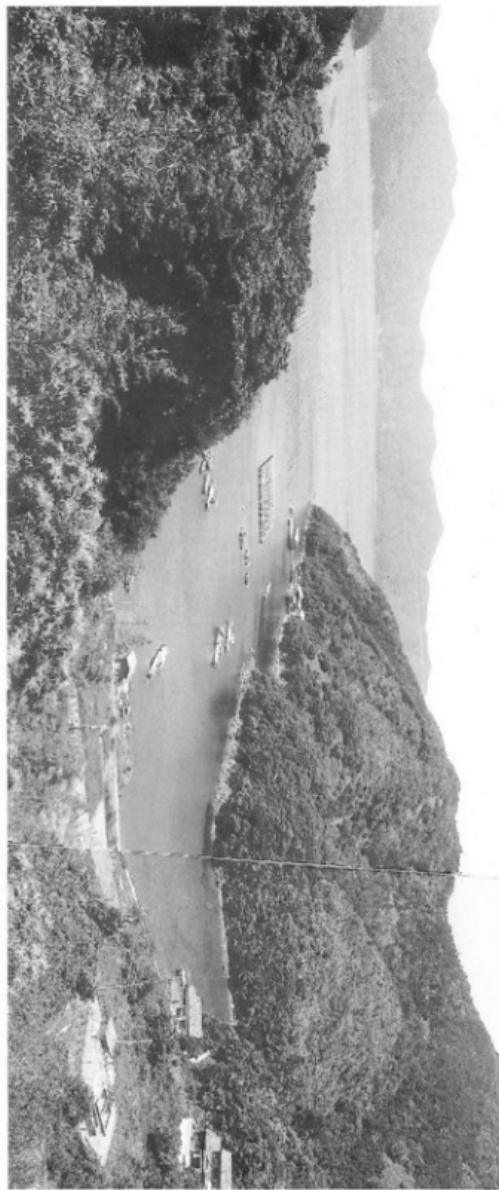
長崎県内では、このように、北、あるいは西からの風や波浪を避けうる海浜の小空間に、最近、多くの遺跡が知られるようになりつつある。小浦遺跡の周辺においても、先述された「周辺の遺跡」の項で述べられている、折島遺跡・串島遺跡などがそうであり、折島の北側に横たわる祝島にもその痕跡が認められる。このような遺跡のありようは、背後のわずかな高まりによって海からの強い風浪を防ぎつつも、生活をしていた人々の存在を窺わせてくれる。この種の遺跡は、海岸線の長い長崎県の特徴とも思われ、五島列島のみならず、壱岐・対馬、また北松浦郡の島々や本土部においても、最近知られるところが増えている。ただ、海岸部にあって、北西からの風浪に耐える、平坦に近い空間というものは、どうしても限られる面があるため、大々的な遺跡として残ることはなく、そこに生活した人数や期間、あるいは、同じ年ににおいても季節による制限を余儀なくされたであろうことは、当然考えられることである。

しかし、このような状況にあっても、生活の基礎の大半を海に置く人々によって、断続的に、なかには現代に至るまで生活されているという事実を見るとき、今後、このような狭小な場所においても、遺跡の存在については、充分な注意をもってみていかねばならないことが考えられる。

最後になったが、今回の調査にあたっては上五島町や教育委員会はいうにおよばず、直接作業にあたっていただいた方々、地元の青木の人達にも、いろいろな面で御助力をいただいた。おかげさまで、無事に調査も終了することができ、さらに、ここにこの報告書をまとめることができたのも、多くの方々のご協力の結果である。つつしんで感謝の意を表わしたい。

(藤田)

図 版



小浦港跡(右手前)上方から若松島を望む



南方から遺跡を望む



遺跡近景



調査風景



遺物出土状況

調査の状況

図版 4

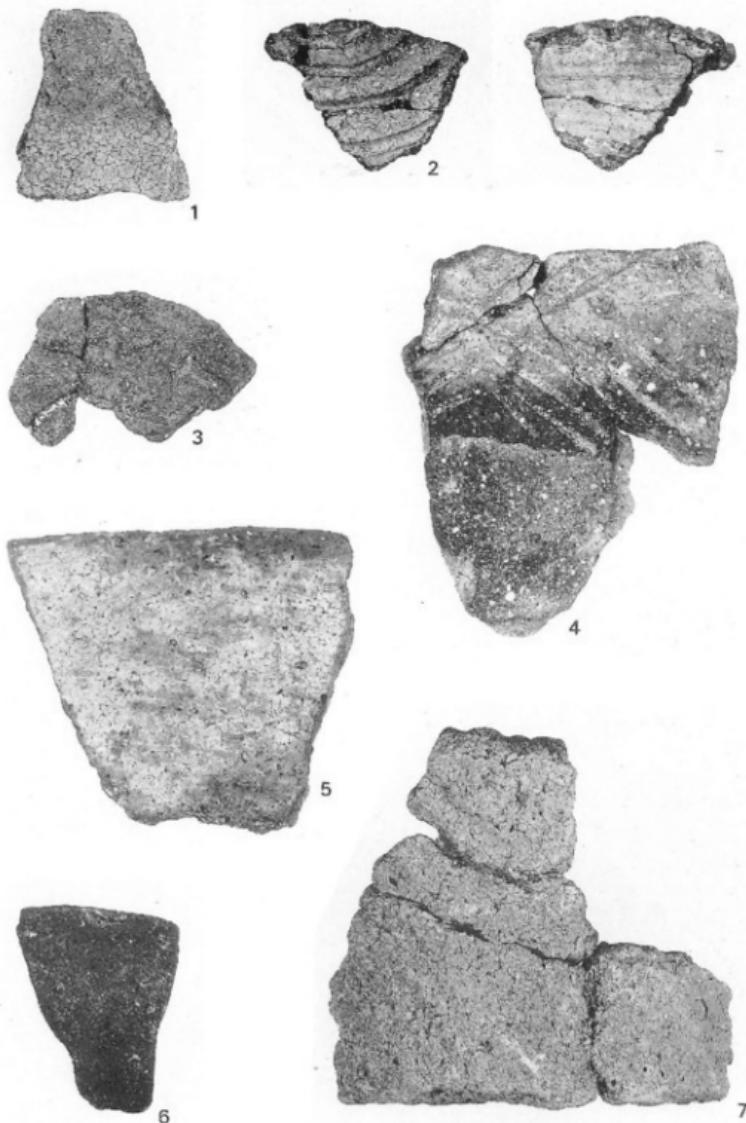


第 2 試掘場 東壁

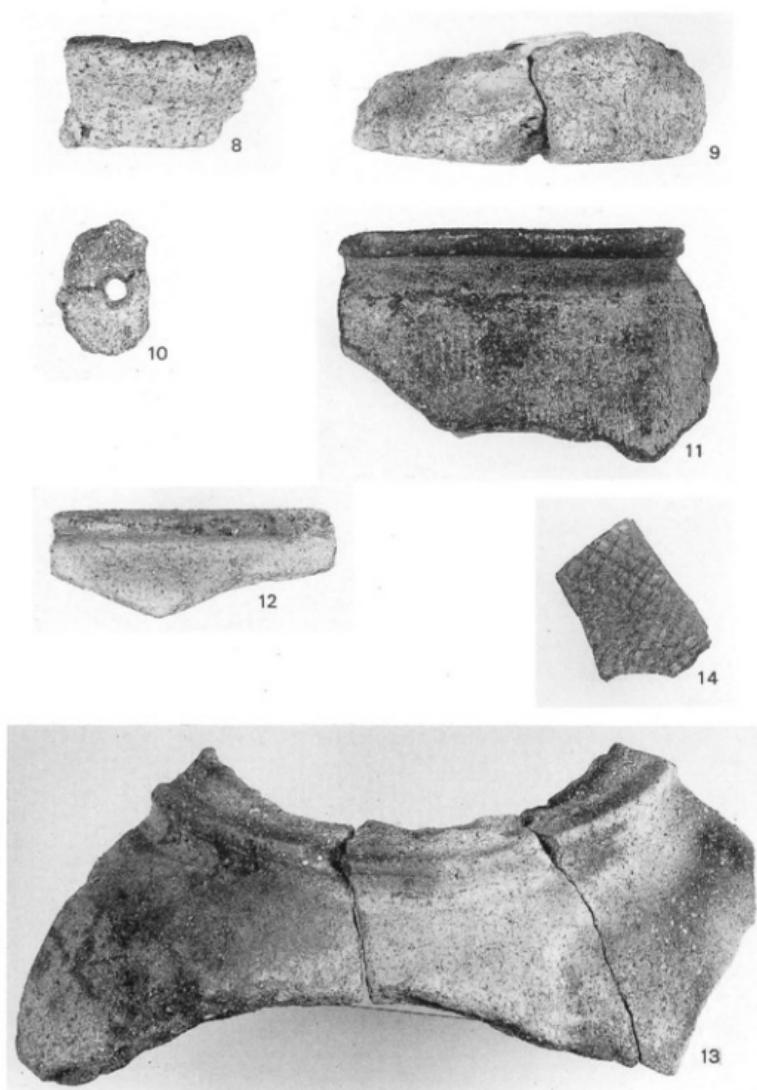


第 3 試掘場 東壁

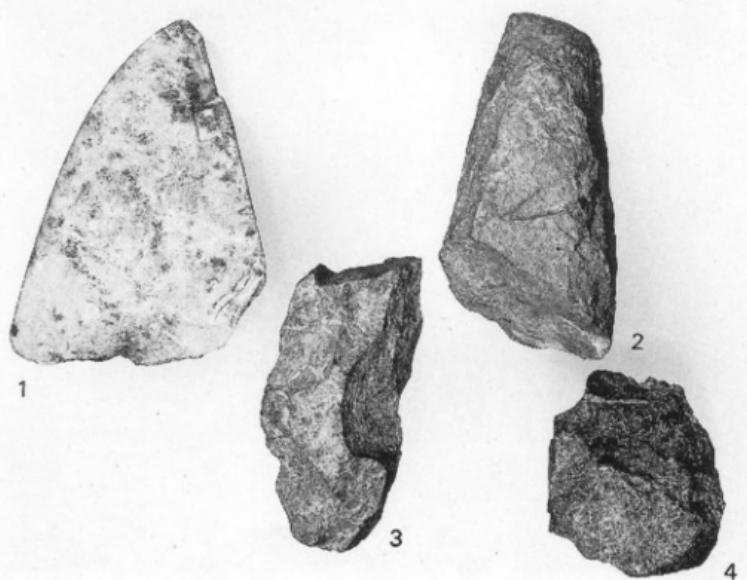
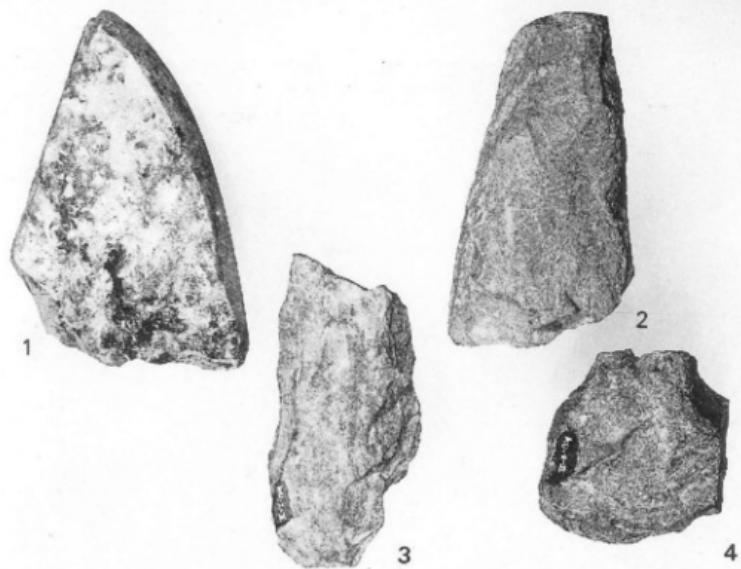
土層



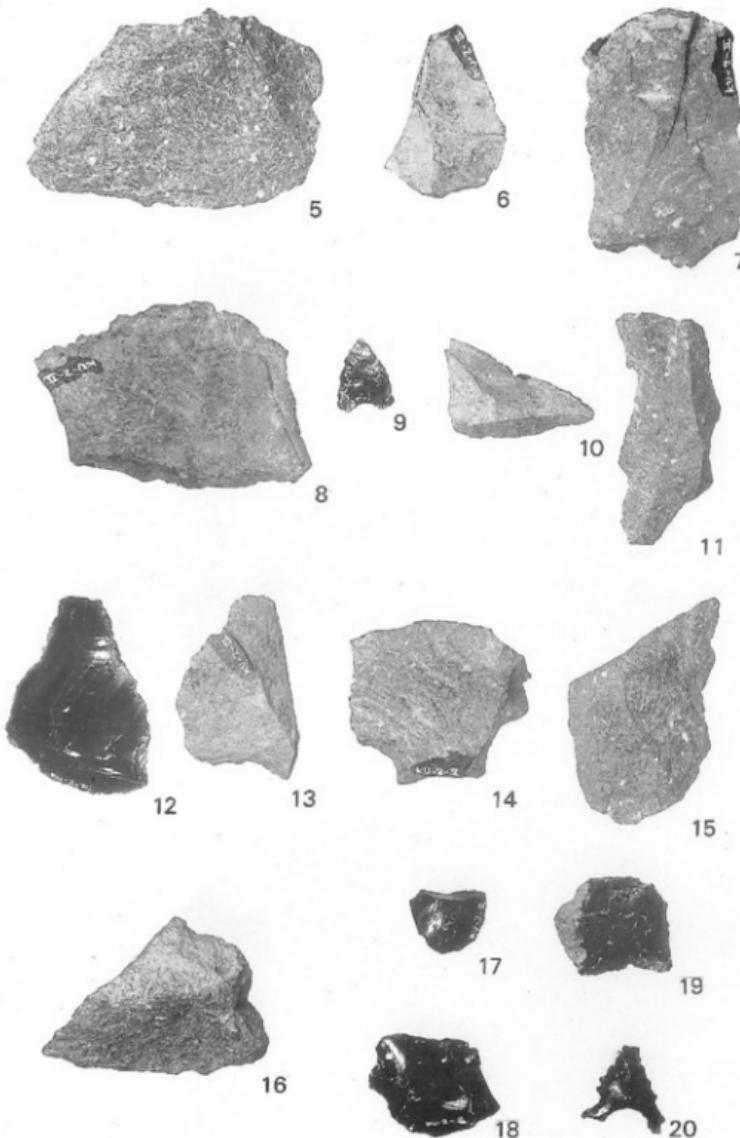
出土遺物(土器 1 箇)



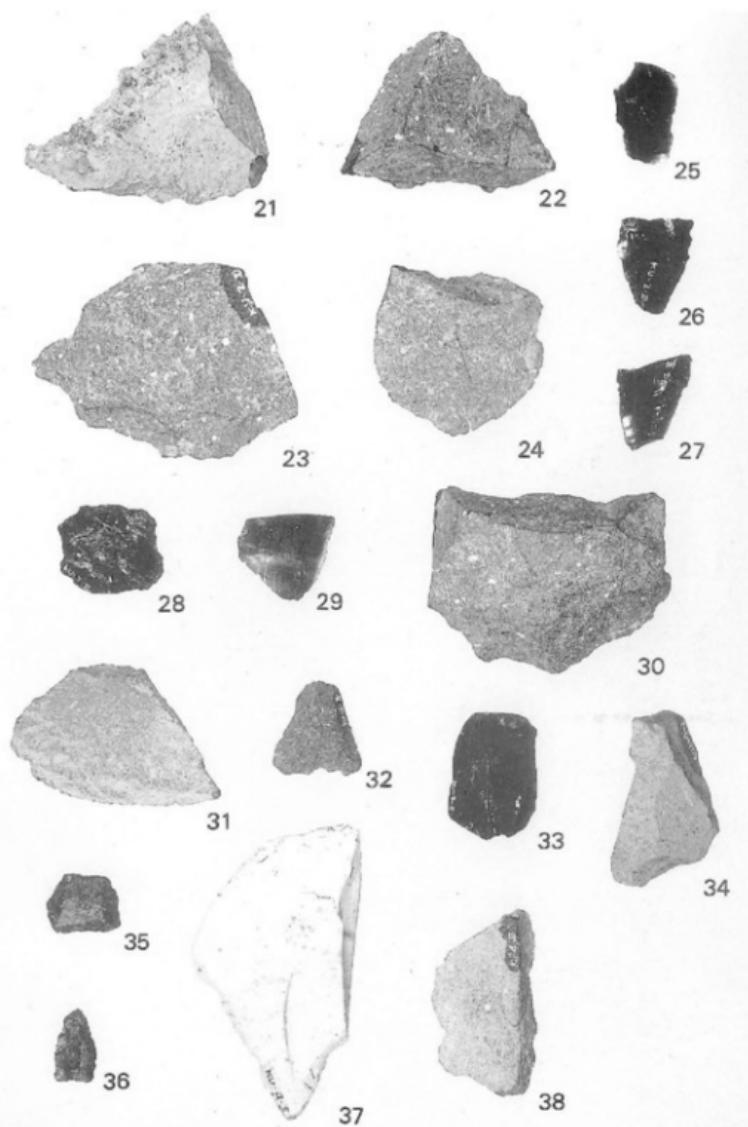
出土遺物(土器 2 種)



出土遗物(石器 1 上段表、下段裏 2)



出土遺物(石器 2 類)



出土遺物(石器 3 36)

上五島町文化財調査報告書第1集

小浦遺跡

昭和62年3月

発行 長崎県上五島町教育委員会
〒857-44 南松浦郡上五島町音方郷1585番地

印刷 川口印刷株式会社
〒851-01 長崎市田中町1020-7